

すべての子どもたちの確かな学力の定着をめざして

— 児童生徒の学力定着調査・意識調査と、保護者の生活意識調査の分析を通して —

西田 晋

児童生徒の確かな学力の定着にむけて授業改善を進めるためには、まず、児童生徒の学力実態や学習に対する意識を把握することが大切である。本研究では、2005年4月に京都市教育委員会が教育研究会と共催で実施した「学力定着調査」「児童生徒の意識調査」「保護者の生活意識調査」の結果を受け、京都市の児童生徒の学力実態をより明らかにするための工夫を加えながら、学力と生活意識について分析と考察を進める。そして、一人一人の子どもたちの豊かな学力の確かな定着を願い、授業改善の視点・家庭への働きかけへの視点として、若干の提言を行う。

第1章 今、課題となっていることは何か

第1節 学力実態分析に求められる視点

PISA 2000年調査とPISA 2003年調査の結果、領域ごとの平均得点を比較すると、国際的に順位を下がったものが多い。ただ、その理由は、全体の得点率が一律に下がったということではない。習熟度レベルごとの比較をすると、「下位層の生徒の割合が高い」ことが、その理由の一つとしてあげられる。そこで、学力実態分析を進めるにあたり、次の3点に留意しながら分析を進める必要があると考えた。

- 1 通過率をもとに上位より25%ずつ、A・B・C・D群の学力階層群を設定し、その群ごとに何が課題となっているのかを分析する
- 2 二つの評価（各教科の目標に準拠した「内容・領域別」と、評価の「観点別」）の視点から分析する
- 3 『平均通過率に対する指数』という指標を設けて分析する

学力階層群別に、「領域・内容別」「評価の観点別」のプロフィールをつくることにより、現段階でさらにのばせることや克服すべき課題がどこにあるのかについて、明らかにすることができるのではないかと考えた。

第2節 今、求められる家庭との連携

国際調査や国内の意識調査の結果からは、学ぶ「意欲」や「学習習慣」を、課題となる共通のキーワードとして示している。「学習習慣」の確立にむけては、学校での指導の工夫に加え、家庭への働きかけについて、さらなる「連携」が求められるところである。

また、厚生労働省や内閣府が実施した調査の結果などから、核家族化の傾向や家族間の結びつきに変化のあることが指摘され、子育て不安や、子

育てに自信がもてない親の増加が懸念されている現状がある。このような社会的背景を受け、すでに各関係機関では、地域のネットワークづくりや子育て支援にかかわる事業の推進を進めているところである。子どもを中心に学校と家庭・地域とが連携を深めることは、家庭の教育力を高めることにもつながり、子どもたちの学力を支える上で大切な意味をもつ。現在の社会的な背景を踏まえるならば、学校と家庭・地域との連携推進がさらに求められているといえる。

第3節 調査の概要

学力定着調査・児童生徒及び保護者に対する意識調査については、京都市教育委員会が2005年4月に実施した結果による。

- ①調査対象 小学校6年生児童およびその保護者
中学校3年生生徒およびその保護者
- ②調査の時期と方法
平成17年4月11日(月)～4月28日(木)
- ③有効回答数 小学校6年生児童 1,027人分
中学校3年生生徒 876人分

調査結果の分析は、学力定着調査、意識調査(児童生徒対象)、生活意識調査(保護者対象)の3つがそろったデータのみを対象とする。

第2章 「学力定着調査」の分析を通して

本章では、「学力定着調査」分析を行い、児童生徒の学力実態と課題を明らかにした。

第1節 小学校「学力定着調査」の結果から

学力階層群(上位より25%をA群、以下25%ずつをB群・C群・D群)を設けて分析をした結果、複数の領域・観点で「格差」がみられた。授業改善を進める際に、留意しなければならない領域・観点、また、特にD群の児童に焦点をあてる必要がある領域・観点として表1に概括する。

表1 小学校6年生「学力定着調査」分析結果概括

| | |
|------------------------|---|
| ○全体に大きい格差がみられた教科の領域・観点 | |
| <国語> | 「関心・意欲・態度」「読む」 |
| <社会> | 「関心・意欲・態度」「技能・表現」「知識・理解」 |
| <算数> | <ul style="list-style-type: none"> ・「数と計算」領域の「関心・意欲・態度」「知識・理解」 ・「量と測定」領域の「考え方」 ・「図形」領域の「考え方」「表現・処理」「知識・理解」 ・「数量関係」領域の「考え方」「知識・理解」 |
| <理科> | <ul style="list-style-type: none"> ・「生物とその環境」領域の「思考」 ・「物質とエネルギー」領域の「技能」「知識」 ・「地球と宇宙」領域の「知識」 |

| | |
|---|---|
| ○学力階層別にみたときに、ABC群とD群との間に格差がみられた教科の領域・観点 | |
| <国語> | 「話す・聞く」「書く」「言語事項」 |
| <社会> | 「思考・判断」「知識・理解」 |
| <算数> | <ul style="list-style-type: none"> ・「数と計算」領域の「知識・理解」「表現・処理」 ・「量と測定」領域の「表現・処理」「知識・理解」 ・「図形」領域の「関心・意欲・態度」「表現・処理」「考え方」 ・「数量関係」領域の「知識・理解」 |
| <理科> | <ul style="list-style-type: none"> ・「物質とエネルギー」領域の「技能」 ・「地球と宇宙」の領域 全観点 |

第2節 中学校「学力定着調査」の結果から

前節と同様に、学力階層群を設けて分析をした。その結果を表2に概括する。

表2 中学校3年生「学力定着調査」分析結果概括

| | |
|------------------------|--|
| ○全体に大きい格差がみられた教科の領域・観点 | |
| <国語> | <ul style="list-style-type: none"> ・「関心・意欲・態度」「書く」「読む」 |
| <社会> | <ul style="list-style-type: none"> ・地理領域の「知識・理解」「思考・判断」 |
| <数学> | 全領域でA群とD群との格差が大きい |
| <理科> | <ul style="list-style-type: none"> ・「生物」領域の「思考・判断」 ・「物理」領域の「思考・判断」「知識・理解」 ・「化学」領域の「思考・判断」 ・「地学」領域の「思考・判断」「知識・理解」 |
| <英語> | <ul style="list-style-type: none"> ・「話す」「書く」の領域 ・「関心・意欲」「表現」「知識」 |

| | |
|---|--|
| ○学力階層別に見たときに、ABC群とD群との間に格差がみられた教科の領域及び観点 (特にD群のポイントが低かった観点も示す) | |
| <国語> | <ul style="list-style-type: none"> ・「関心・意欲・態度」「書く」「言語事項」 |
| <数学> | <ul style="list-style-type: none"> ・「数と式」領域の「関心・意欲」「表現」「理解」「理解」 ・「数量」領域の「表現」「理解」「知識」 ・「図形」領域の「表現」「理解」「知識」 |
| <理科> | <ul style="list-style-type: none"> ・「生物」領域の「思考・判断」 ・「物理」領域の「技能・表現」「知識・理解」 ・「化学」領域の「思考・判断」「知識・理解」 ・「地学」領域の「思考・判断」 |
| <英語> | <ul style="list-style-type: none"> ・「話す」領域の「関心・意欲」「表現」「知識」 ・「読む」領域の「関心・意欲」 ・「書く」領域の「関心・意欲」「表現」「知識」 |

第3節 「学力定着調査」分析のまとめ

「学習意欲」や、「表現」にかかわる観点で、共通する課題があることが明らかになってきた。この課題を克服するために、特に格差のみられたD群の子どもたちが、学ぶ意欲をもつことや「表現にかかわる」「表現を支える」力を身につけるために、具体的な方法や道筋を示す支援が必要である。

第3章 「意識調査」の分析を通して

第1節 子どもたちの意識調査から

「朝食の摂取状況」「テレビ等の視聴時間」の意識調査結果では、A群とD群との間に有意な格差があった。「家庭学習の時間」の意識調査からは、とりわけD群の児童生徒への家庭学習の定着にむけた具体的な支援が必要であることを示唆する結果となった。また、授業の理解度や学習に対する積極性についても、学力と関連があることが明らかになった。

第2節 保護者の生活意識調査から

テレビを見るときにの習慣や、新聞・本とのかわりについて、A群とD群の保護者の意識には有意な格差がみられた。また、「学力や進路」のことで悩んでいるD群の保護者の姿が浮かび上がってきた反面、授業参観や懇談会の参加率の低さや、保護者同士のつながりが希薄になっている傾向が伺えた。保護者がどのような情報を望んでいるのか、そのニーズを探りながら、学校が家庭に働きかけることが求められている。

第4章 確かな学力の定着を願って

第1節 授業改善にむけて

学力定着調査および意識調査の結果から、「わかった」「できた」という達成経験や満足感を味わうことができる授業展開を工夫することや、「格差のみられた教科領域」に焦点をあてて教材研究をさらに進めることが必要であると考えられる。授業改善を進める視点として「学習意欲を高めること」「学びを進める力を身につけること」を大切にしたい。いずれも、特にD群の子ども達に焦点をあてた評価を、指導者自らの「指導の評価」として受け止め、授業改善に生かすことが大切である。

第2節 家庭への働きかけにむけて

子どもが最も力が発揮できる「習慣」「環境」とは何かについて、学校と家庭とが子どもの情報を共有しながら話し合うことが大切である。「学びの環境作りを進めること」「家庭での学習を習慣化すること」を、家庭への働きかけを進める視点として大切にしたい。